

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介7

重要文化財 阿蘇家文書(34巻36冊)

工藤 敬一

恩賞への不満を持ちながらも、南朝側（宮方）の武将として生涯を送った阿蘇大宮司忠良惟澄は、最晩年には庶子の八郎二郎を代官（名代）に登用していた。一方嫡子の惟村は、貞治元年（正平17=1362）には、大友氏時の推挙を受けて室町幕府から肥後の守護に補任されるなど、かねて武家方として活動していた。惟澄は死期の近いことを覚った時、一族の将来を考え嫡子の惟村を後継の惣領に立てた。惟武はこれを不服として一族中の支持者をたのんで反抗の動きをみせた。惟澄は惟武の逆心を責め、正平19年7月10日、大宮司職と本末社領や他国の所領、それに綸旨・令旨以下の重代の文書を惟村に譲って間もなく死去した。惟武は10月15日惟澄の遺跡安堵を大宰府征西府に求め、翌年3月28日、惟武を大宮司とする懐良親王の令旨が出された。一方惟村は当然父の譲りの正当性を主張し、貞

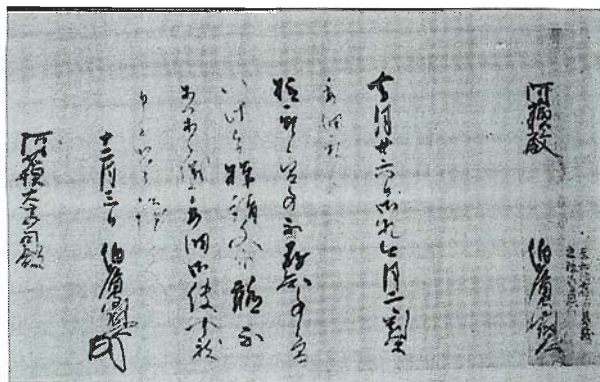
治6年（正平22=1367）10月25日、二代將軍足利義詮から大宮司職と神領の安堵をうけた。こうして阿蘇大宮司家は宮方、武家方の二つに分裂し相争うことになった。

今回紹介する文書は、惟村が社家代々の證驗（證文）を抑留している、という惟武の訴えを受けて、征西府が肥後の有力勢力である宇土の宇土道光と八代の名和顯興に、その実否を尋ねたのに対する両人の回答である。このような調査命令に対する回答を請文といい、それには、もし偽りを申したなら八幡大菩薩や天満天神の神罰を受ける、という「起請の詞」を付けるのが、当時の慣しであった。そしてこのような請文は、多く自筆で書き署名の下に「請文」と記し、花押はその裏面に書いた。これを裏花押という。裏に書くのは「裏書きする」という言葉からもうかがわれるように、間



[A]
宇土道光請文
（端裏書）
「宇都喜岐入道々光請文」
正平廿四年十一月十七日御教書、同十二月一日謹令拜見候畢、
抑如被仰下者、阿蘇社大宮司惟武申社家代々證驗事、惟村令抑留加凶徒云々者、彼文書紛失之有無、載起請之詞可注申云々、此段承及候之條實正候、若此条偽存候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
正平廿四年十一月一日
沙弥道光 請文（裏花押）

[B]
名和顯興請文
（端裏書）
「伯耆守顯興請文」
去十一月十七日御教書、同十二月二日到来、謹拜見仕候了、
抑被仰下候阿蘇大宮司惟武申社家代々證驗、惟村令抑留之由事、以甲乙人之廣說難言上候、雖國中事候、不眠近仁候之間、文書紛失之有無、分明不存知仕候、若此条偽申候者、八幡大菩薩、天満大自在天神可蒙冥罰候、以此之旨可有御披露候、顯興恐惶謹言、
（正平廿四年）
十二月三日 伯耆守顯興（裏花押）
進上 御奉行所



[C] 名和顯興書状
 (折封ウハ書)
 「阿蘇殿 伯耆守顯興」
 去月廿六日御札、今月二日到来、委
 細承候了、
 抑承候間事、不存知事候間、以此旨
 捧請文候、聊不等閑之儀候、委細御
 使可被申候、恐々謹言、
 (正平廿四年)
 十二月三日 伯耆守顯興(花押)
 (惟武)
 阿蘇大宮司殿

る点が面白い。そして顯興の請文の末尾は、「顯興恐惶謹言」と結ばれている。このように文中に指出人の名前をいれるのは大変丁寧な書き方である。その上顯興は惟武に対し、「知らない」と返事したことについて、「聊も等閑の儀」ではないと申し開きの書状を送っている [C]④。顯興は随分と気を遣っているのである。道光と顯興の惟武や征西府に対するスタンスの相違など、いろいろ検討の余地はあるが、ここでは立入らない。

なお [C] は別として、征西府の御奉行所に対する回答である [A]・[B] はどうして阿蘇家文書として伝来したのであろうか。おそらく兩人に回答を求める征西府からの御教書は惟武を通じて伝達され、その回答もまた惟武を通して提出されたのではなかろうか。それは [C] に「去月廿六日の惟武の御札、今月二日到来」とあり、[A]・[B] にも「去十一月十七日の征西府の御教書、同十二月二日到来」とあることから察せられる。請文を受けとった惟武が、写を作って征西府に提出したか、直接征西府に披露したかは不明であるが、このように見れば、征西府宛の請文である [A]・[B] が阿蘇家に伝来した事情も理解できるであろう。

④「大日本古文書」は [C] の(折封ウハ書)について、「或ハコノ文書ノモノニアラザルベシ」とし、さらに宛名についても「コノ一行後人ノ加筆ニカ、ル」と註記している。たしかに筆跡上若干の疑問があり、なお検討の必要を感じているが、後考に委ねたい。

(くどう けいいち 文学部教授 国史学)

違いない、という意味が込められているのである。

ところでこの二通を比べてみると、道光は惟村の抑留の事実は間違いないとしているが [A]、顯興は廣(荒)説(噂)では何とも言えない、自分はそれほど親しい間柄ではないので実否は知らない [B]、としてい

新情報物流システム試論

— 長期研修報告に代えて —

浦田博臣

1. はじめに

いま、大学図書館は情報発信基地への転換が求められているという。

わたしは、そこにハブ空港のイメージを重ねてみた。それは、長い旅の果てにおかれた到着点ではなく、学術情報がそこから分岐し、次の地点をめざすための新たな出発点というイメージである。

しかし、熊本大学においてそのイメージどおりに情報を発信しようとする、はなはだ困ったことには、いわゆる基地機能の中の、基本的で極めて重要な部分

がまだ整備されていないことに気づかざるをえない。

そこで、これからその問題について検討し、できれば、現時点におけるひとつの解答案を示してみたいと思う。

2. 問題点 — モノのやりとりをどうするか —

(1) ふたつの情報流通

熊本大学が新制大学として発足してから、すでに半世紀近くを経、学内外の教育研究を取り巻く環境は大きく変貌しつつある。